英語教育の教育心理学的研究に関する文献分析*

——各教科教育法に関する教育心理学的研究Ⅸ（英語科 その2）——

福島大学 羽 鳥 博 愛**
東京大学 神 保 信 一

ま え が き

本稿においては、わが国における英語教育に関する主要な文献を収録し、これを

- 〔Ⅰ〕 英語学習の基礎に関する心理学的研究
- 〔Ⅱ〕 特に指導法の心理に関するもの
- 〔Ⅲ〕 測定・評価に関するもの
- 〔Ⅳ〕 その他
 - (i) 調査・報告に関するもの
 - (ii) カリキュラムに関するもの

の4つの部門に分けてアルファベット順に配列し、部門ごとに解説を加えるとともに、残された問題を明らかにするように心がけた。

なお、文献の中で、いくつかの部門にわたるものは、ページ数の多い方の部門に入れることにした***。

〔Ⅰ〕 英語学習の基礎に関する心理学的研究

英語教育の心理学的基礎についての文献は、大別して4つに分けることができる。すなわち、

- (i) 過去の研究結果にもとづいて、一般的に英語教育の心理学的側面を論じたもの

* Psychological studies on learning of school subjects: IX — A book-review on English language teaching—

** by Hatori, Hiroyoshi (Fukushima University) & Jimbo, Shin-ichi (University of Tokyo)

*** ここでひとつお断わりしたいことは、英語教育において重要な文献であつても、教育心理学的考察のなされていないものは、すべて省略してある。また、お送りいただいた文献でも、容易に入手できないようなものなどは除外しなければならなかつた。

文献をお送りくださった研究者、研究所、大学に対して心からお礼を申し上げるとともに、掲載できなかったものについては、お許しを頂きたい。

なお、われわれは、さらに完全な文献リストの作成をめざしているのも、もれているものなどについてご教示いただければさいわいである。

(ii) 外国語学習に対するレディネスの問題を論じ、あるいは実験したもの

(iii) 個々の事実について実験を行ない、その実験から原則的なものを導きだそうとする試み

(iv) 英語学習と興味などとの関係を扱っているものである。

まず、レディネスについてみれば、(17)、(21)には、外国語の学習に必要と考えられるレディネスについて書かれている。(4)は、外国語学習に必要と考えられるレディネスとして、同意語、文章完成、ローマ字小文字弁別、音の弁別、人造語による推理の5つが調べられるようなテストを施行し、これと英語学力との関係を追究したのである。

英語学習のレディネスには、いろいろなものが考えられるが、模倣、記憶、類推、音声に対する敏感さなどが重要な要素である。

実験的研究のうち、(24)は記憶力が英語学習に及ぼす影響を調べたもの、(6)には絵や母国語の使用が単語の把持にどのような関係をもつかについて、ソ連で行なわれた実験が紹介されており、(20)は語の認知の能率をあげるために教具をいかに活用すべきかを述べている。

(10)は文章把握の実験場面に働く諸要素を単純化して実験し、どのようなことが内容理解に必要であるかを調査している。

(16)は、小保内虎夫・永沢幸七らを中心とするグループの、英語学習に関する一連の心理学的研究の最初のものである。このグループの研究は、英語動詞の範疇の考察から英語文型の研究に入り、いろいろの立場から学習者のおかすまちがいを分析し、学習時の思考過程にせまろうとしている。これらの結果は毎回の学会に報告されているが、その一部がまとめられたものが(13)、(14)である。(15)にはこのグループの研究結果とともに、文献(26)の実験結果も報告されている。このグループの研究は、従来ややもすれば経験的基礎にのみ頼りがちであつ

た英語教育の問題を、心理学的にとりあげる気運をつくった点で意義ふかい。

英語学習に及ぼす背後条件の1つとして、興味の問題を論じたものが、(18)、(23)であり、(19)はこれを実験的に解明しようとしている。

以上に述べたような心理学的研究が本格的におこなわれるようになったのは、ごく最近のことであるが、従来の教授法の書物の中で心理学的配慮の必要を説いているものは、(1)、(3)などである。

戦後、英語教育における指導法の改革の必要性が痛感されたが、心理学的立場からの考察を述べたのが、(5)、(12)、(22)などである。

(7)には Kaulfer, M. のあげている外国語学習の原理が解説されている。

(9)は現代の英語指導法のうち、主要と思われるパーマーの方法、ハーバード大学の方法、ミシガン大学の方法のおおのの心理学的な側面について述べたものであり、(8)には戦時中にアメリカで行なわれて効果をおさめたといわれる1方法について解説が加えられている。

(11)は外国語学習で転移のはたす役割について解説した数少ない文献のひとつである。(2)は英語教育法に関するものの中では、最も多くのページをさいて、いろいろな心理学的に配慮すべきことについて述べている。

以上が英語教育に関する心理学的事実について書かれた文献であるが、これらの研究を通覧して感じられることは、国語学習や数学学習についての心理学的研究に比べれば、同じ道具教科でありながら、英語教育の研究がはなはだ少ないということである。このことは、教科教育に関する教育心理学的研究書において、英語教育のことがほとんどとりあげられていないことから知られるであろう。

発達の面では、すでにふれたとおり、レディネスについてはかなり研究されている。しかし、主として英語教育の問題の対象となる中学生は、どれだけ英語的言語意識を持つていであろうか。たとえば、受身や完了時制に対する理解はどの程度であろうか。中学生でいどの学習者の興味を、もつとひきつけておける教材はどのようなものがよいであろうか。このような問題が、発達の明らかにされることが必要であろう。

また、まづ手がつけられていないが、＜英語学力の構造＞といったものが明らかにされることも、残されている大きな問題といわれなければならない。

II 特に指導法の心理に関するもの

英語指導法の教育心理学的文献は、次の4つに大別される。

- (i) 心理学者の英語指導法全般に対する解説、ないし実験報告
- (ii) 指導技術の個々の面についての分析検討
- (iii) 生徒の個人差に応ずる能力別指導に関するもの
- (iv) 視聴覚的方法による指導に関するもの

(31)は英語指導法についての、心理学者の最初の著作である。この中には、著者の盲人の読書に関する実験から得た経験がいかされておられ、一語一語、訳語をあてはめることの危険など、随所に心理学者らしい考察がみられる。

(34)、(35)には、東京教育大学グループの研究結果にもとづいた指導法の解説がみられる。

(44)は、昭和33年に改訂された中学校の英語科学習指導要領の成立過程、意義、内容などについて、新指導要領の作成委員側の解説と、民間専門家の反応を収録したものであるが、指導法の項の解説は、特に教育心理学的な見地からなされている。

(41)は、東京大学の沢田慶輔を中心とする研究の、2年間の成果をまとめたものである。その結果は、すでに学会に報告されているが〔(67)、(40)〕、特に(40)は、教師の指導法を質問紙やテープ・レコーダーによる録音でとらえ、指導法と生徒の学力との関係を論じている。また訳読については多面的に分析し、生徒が内容把握に失敗する原因を探究する試案を示している。

個々の指導技術に関するものとしては、まず第1に発音に関するもの(43)があげられる。これは日本語の発音と英語の発音を比較対比して教えることを提唱している点で、このごろしきりに問題とされる、相異なる言語間のコントラストを重視するミシガン大学式指導法の精神と合致する点で興味がある。

ミシガン大学式指導法の重んずるもののひとつに、センテンス・パタンのドリルがあるが、その有効性を心理学的に例証しようとした試みが(26)であり、その結果は(15)にみられる。

また、生徒はどの程度、文型を識別することができるかを調査し、それを入門期の指導に利用しようとしたのが(32)である。

特殊な教授法を考案し、それを実施している両洋学園の方法についての吟味は、(42)にみられる。

次に、現今の英語教育では能力別指導の問題が重要な課題となつてい。これは、現在の中学校においては、能力、環境の非常に異なる多くの生徒を扱わなければならないことと、選択制度であることに問題の源があ

る。この問題については、(27), (29), (30), (38)などのようにさまざまな論議がなされ、最近の指導法に関する書物は多かれ少なかれこのことにふれている [(49), (51)] が、一書にまとめられているものとしては、(28)が唯一のものであろう。

これらの諸論は、生徒の進路、適性に応じて能力別の指導を行なうこと、その方法としては、学級内における組分けと、同一のクラス内でのグループ別指導によることをすすめている。と同時に、不振児を劣等感におちいらせないように注意すべきことが論じられている。しかし、そこには多くの問題を残しており、今後、さらに研究を要するもののひとつであろう。

戦後、日本におおにとりいれられた教育技術のひとつに視聴覚機材を利用する方法がある。この方法が心理学者、あるいは教育学者により推賞されるにおよんで、この方法の英語教育における利用についても、多くの論議がなされることになった [(33), (36)]。また、近年出版される英語指導法の書物は、この問題にふれはじめている [(49), (54)]。これらはラジオ(39)、テープ、レコードによる正しい発音の習得の方法に関するもの、幻灯、映画、絵などによつて英語を現実 に即して理解させることの必要を説くもの(25)などがあるが、論議に終始するものが多く、実験的にその有効性を証明している研究は比較的少ない。(37)はその実験報告である。

今後の指導法に関する研究としては、実際の複雑な指導場面における教師と生徒の関係、指導法の効果をどのようにとらえるか、またいかに簡略化して実験の対象としたらよいか、などが研究されるべきであろう。

Ⅲ 測定・評価に関するもの

測定・評価に関するものとしては、次の2つに大別される。

(i) 評価の理論的な考察

(ii) 評価の結果についての考察

英語の評価は、(i) きく・はなす、(ii) かく、(iii) よむの3つの観点からなされなければならないが、これまでのものはその能力の分析を試みずに、テスト技術としての客観テストのことを論じているものが多い [(47), (49), (50), (51), (54), (55)]。

これは英語教育の研究が英語学者によつてのみおこなわれていて、心理学的研究がなされていないことからくるものである。英語評価の統計的処理についての研究は(48)があるにすぎない。どの学年で、どのくらいのことを要求すべきかを、くわしく領域ごとに検討したものとしては(45)がある。英語科における態度の面(53)、教育

条件との関係の分析を行なつたもの(56)は、特殊なものといえる。多くのものが評価の技能面のみを論じている中で、技能的なものと教養的なものとに分けて、しかもそれを組み合わせて考えているのは(46)のみである。

次に、以上のような論議にもとづいて、全国的に、中学生、高校生の英語学力を調査した最近の総合的なものには(62)がある。

個々のばあいにはわたつての評価には、興味、教師への要望事項、学力の上下群による相違について調べたもの(67)、地域差について論じたもの(66)、大学生の英語学力について調査し、学力不振の原因を追究したもの(58)などがある。小学生がどの程度まで、英語学習をなしうるかについて検討したものは(63)である。

以上は学力調査のみにとどまつているが、それにもとづいて、指導法、学力構造の検討にまで調査結果を利用しようとしたものに、(59), (60), (61), (64)がある。教材についての研究としては、各種の文型が現行の教科書の中にどのように現われるかを調査したものに(65)がある。

このような研究の対象となる測定・評価の方法は、採点者の主観がはいらないようにするため、また、多数の被験者の結果をすみやかにまとめられるように、いわゆる客観的テストの形式をとらなければならないのはもちろんである。しかし、すべてが客観的テストで測定できるとは考えられない。従来、主観的テストの長所とされていた面、すなわち、被験者の思考過程のような面を探るためには、現行の客観的テストでは不十分である。たとえば、内容と合致するいくつかの日本語を選ばせることにより、長い英文の大意把握が測定できるであろうか。たとえこれでよいとしても、それでは実際に大意を生徒に要約させた結果とどれだけの相関があるだろうか。このように考えると、大意把握力とはどのようなものかということすら、まだ明らかにされていないのに気づくのである。

評価方法が確立されるためには、英語学力の構造が明らかにされ、英語学力の検査対象とすべきものが定められ、しかもそれらを簡単に、明確に把握することができるよう研究が行なわれなければならないのである。

Ⅳ その他(調査・報告およびカリキュラム)

厳密な意味で教育心理学的研究といえるものは、以上の3つの分類に含まれるものであるが、英語教育の現状理解のために参考となるような文献について、次に述べるようにする。

これを大きく分ければ、第1はいろいろの調査結果お

および現状報告(68~81)であり、第2はカリキュラムに関するもの(82~93)である。

第1のものについては次のようなものがある。各県の全般的な学力調査の例としては、(68), (71), (81), 個々の能力についての調査結果、すなわち、発音の困難点の調査(78), スペリングの誤りの傾向[(75), (77)], オーラル・ワークから教科書にはいるさいの混乱についての報告(76), 県で使用した教科書中にあらわれる文型調査(74), 数種の教科書についての分析(79), 英語科に対する生徒の意識調査(80), 学習指導形態の調査(70), 全国的な立場から現場における問題点が論じられたものとして(72), (73)がある。

昭和30年までの英語教育一般についての参考書を収録してあつて便利なものとして(69)がある。

第2にカリキュラムに関しては、以下のようなものがある。文部省の指導要領にもとづき、その地方の実情に合うように、市や県の中学校のカリキュラムを設定したものには(82), (83), (85)があり、高等学校1年の英語の言語的内容分析を行なつたものに(91)がある。細部にわたるものとしては、基本語いの検討を行なつたもの[(86), (93)]どの程度の文法的知識を与えたらよいかを示したものの(87), (89), (90)があり、英語指導のさいに教えることが望ましい背景知識の案を示したものに(88)がある。その他、特殊なものとしては、特別教育活動において英語科をどのように取り扱つたらよいかについて、くわしい指導案を示したものに(84)がある。

あ と が き

すでに述べたように、今日までの英語教育についての研究は比較的少ない。そして、この方面の心理学的文献は、主として過去の遺産の整理と、ごく初歩的なものにすぎず、実際の教室場面で応用できるような基礎的研究もほとんどなされていない。これは戦前、英語教育が義務教育ではとりあげられておらず、教育心理学の主な対象からはずれていたことにもよるのであろう。

しかし、現在では英語教育は選択教科としてはあるが、義務教育の中学校で行なわれており、従来のように選ばれた生徒のみならず、数多くの生徒を対象としなければならない。

それゆえ、生徒の発達に即した研究が、実際の教室場面にもとづいて、基礎的なものから積みあげられていくことが望まれるのである。

文 献

〔I〕 英語学習の基礎に関する心理学的研究

- (1) 青木常雄：高等学校英語教授法。研究社，1949，16~25.
- (2) Gauntlett, J. Q. : *Basic principles of English language teaching*. 三省堂 1952, 40~76.
- (3) 語学教育研究所：外国語教授法。開拓社，改訂1版，1946, 30~37, 41~59.
- (4) 芳賀純：外国語学習適性検査の研究。日本心理学会第20回大会報告論文抄録*。1956, 343 f.
- (5) 芳賀純：言語教育。海後宗臣・村上俊亮(監)：教育方法学。誠信書房，1958, 217~230.
- (6) 波多野完治：言語教育の心理学における動向。梅根悟・勝田守一(編)：現代教科教育講座(2)，言語教育。河出書房，1957, 141~170.
- (7) 波多野完治：外国語学習の原理。波多野完治・沢田慶輔(編)：現代の言語心理学，牧書店，1957, 221~236.
- (8) 波多野完治：速習法の心理学的基礎。波多野・沢田(編)：上掲書，237~251.
- (9) 羽鳥博愛：速習法以後の動き。波多野・沢田(編)：上掲書，252~264.
- (10) 羽鳥博愛：文章理解に及ぼす situation の影響(英語のぼあい)。日本応用心理学会第23回大会研究発表抄録集**。1957, 25 f.
- (11) ジョルダン, A. M. (白根孝之訳)：教育心理学，上巻(教科の練習の転移——外国語)。中教出版，1951, 316~336.
- (12) 文部省：教育心理(外国語の心理)。学芸図書，1949, 391~394.
- (13) 村石昭三：外国語学習——抵抗の所在。阪本一郎他：言語心理学。学芸図書，1956, 218~221.
- (14) 永沢幸七：外国語学習。教育心理学実験講座 3。岩崎書店，1956, 103~122.
- (15) 永沢幸七：センテンス・パターン。講座コトバの科学7，コトバの教育。中山書店，1958, 249~259.
- (16) 小保内虎夫・永沢幸七：英語学習の心理学的研究(1)——和文英訳に表われた誤謬の類型(1)。応心・11回，1950。日心・17, 18, 19, 20, 21, 22の各回；応心・12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 24の各回***

* 以後これを(日心・20回)のように略記する。

** 以後これを<応心・23回>のように略記する。

*** この継続研究は同一のテーマで長年にわたり、いろいろな方面からの研究報告があり、21回報告までであるが、紙面のつごう、その発表された回数を示すにとどめる。くわしくは(14), (64), (65)にまとめられている。

- (17) 小保内虎・夫永沢幸七：外国語学習のレディネス。教育心理学事典，金子書房，1956，41 f.
- (18) 落合嬌一：英語学習の興味。中学（国・社・英）教育技術，1952，3—10，73—76.
- (19) 岡田穂並：英語科における情緒的興味。信濃教育，1955，825号，26—31.
- (20) 大浦英・他：岩手県基準教育課程中学校英語科（指導篇）（試案）。岩手県教育研究所，1955，51—60.
- (21) 品川不二郎：外国語学習のレディネス。青年心理，1953，4，416—420.
- (22) 穴戸良平：外国語教育の心理。教育心理学事典，金子書房，1956，58—60.
- (23) 竹中治郎：英語教育と新教授法。泰文堂，1955，15—22，29—34.
- (24) 土屋徳重・他：記憶と忘却——英語学習を中心として——教育と医学，1958，6，225—230.
- 〔Ⅱ〕 特に指導法の心理に関するもの
- (25) 淡路七郎：英語教育における環境構成。中学（国・社・英）教育技術，1952，4—3，74—78.
- (26) 羽鳥博愛：英語学習における pattern drill の効果について。応心・24回，1957，11.
- (27) 日比野文一・土井喜久一：個人差に応ずる英語の学習指導。愛知県教育文化研究所，1952.
- (28) 池永勝雅：英語科カリキュラムと能力別指導。新光閣，1952.
- (29) 稲垣春男：中学校英語教育における能力別指導について。教育新潮，1956，7—7，16—19.
- (30) 加藤豊子：中学校英語科における能力別学習指導について。京都府教育研究所，教育研究，18，1958，134—151.
- (31) 草島時介：英語教育通論。刀江書院，1951.
- (32) 松峯隆三・他：英語入門期の指導——文構造を識別し運用する能力の実態とその指導法について。信濃教育会教育研究所年報1，1958，32—46.
- (33) 水垣三郎：視聴覚教具による英語指導。中学（国・社・英）教育技術，1952，3—12，67—71.
- (34) 小保内虎夫・永沢幸七：外国語学習法。教育心理学事典，金子書房，1956，42 f.
- (35) 小保内虎夫・国安清香：外国語学習の指導。教育心理学事典，1956，43 f.
- (36) 大沢彰：視聴覚教具を利用した英語指導。中学（国・社・英）教育技術，1951，3—4，109—112.
- (37) 嶋田正：英語科における視聴覚器材（テーブコーダー）の利用——実験授業報告。福井大学学芸学部教育研究所。教育研究1，1952，3—20.
- (38) 穴戸良平：英語の学習における個別指導。青年心理，1950，4，421—425.
- (39) 穴戸良平：英語科——学習指導における放送の利用。中等教育資料，1954，3—6，1 f.
- (40) 沢田慶輔・他：学業不振児に関する教育心理学的研究——外国語科英語のばあい。日心・22回，1958，391 f.
- (41) 沢田慶輔・他：英語科における学業不振児の研究。教育心理学研究，1959，7，96—107.
- (42) 滝沢武久・羽鳥博愛：両洋学園の英語教育。応心・25回，1958，9.
- (43) 株垣実：英語発音入門教授法試案。和歌山大学学芸学部紀要，教育科学1，1952，99—117.
- (44) 山内太郎（編）：英語の新教育課程。国土社，1958，81—98.
- 〔Ⅲ〕 測定・評価に関するもの
- (45) 英語教育研究会（編）：中学校英語科の評価基準。新光閣，1951.
- (46) 日俣周二：外国語科の評価。教育評価事典，国土社，1955，248—254.
- (47) 飯野至誠：英語科教育法。柳原書店，1958，44—48（学習意欲），164—192（評価）.
- (48) 印東太郎：外国語科の評価。教育心理学事典，金子書房，1956，44—46.
- (49) 石橋幸太郎（監修）：中学校教師のための英語科。岩崎書店，1958，280—315（評価），316—336（視聴覚），337—351（能力別）.
- (50) 今野正則：やりよい中学英語の評価法。中学（国・社・英）教育技術，1952，3—11，98—103.
- (51) 教師養成研究会：英語科の教育。学芸図書，1956，193—199（個人差），209—242（評価）.
- (52) 森三重雄：中学校英語の評価。明治図書，1956.
- (53) 大沢彰：英語科における態度評価の仕方。中学（国・社・英）教育技術，1953，4—12，30—32.
- (54) 大沢茂：英語教授法。南雲堂，1958，121—140（評価），141—195（視聴覚）.
- (55) 斉藤美洲：英語教育。岩崎書店，1951，161—174（評価）.
- (56) 山梨県立教育研修所：英語科における分析テスト作成ならびに教育条件との関係。同所，研究紀要第30集Ⅳ，1957.
- (57) 安藤公平：大学新入生の基礎学力について。応心・12回，1953，56 f.
- (58) 安藤公平：学業不振の要因——英語科の場合。日心・20回，1956，351 f.

- (59) 羽鳥博愛：英語書きとりの誤謬の分析。応心・22回，1956，70。
- (60) 広田済：中学校英語指導の諸問題 (1)，(A) 教授法 (B) 共通の誤謬。滋賀大学学芸学部，研究論集 1。1952，29～32。
- (61) 池田貞美：中学校における英語学習の診断的研究——第1報告・学習過程の分析を中心として，佐賀大学教育学部，研究論文集 2，1952，102～121。
- (62) 文部省調査局：文部省全国学力調査。帝国地方行政学会，1958，11～45，74～81，98～107。
- (63) 檜崎浅太郎：小学校 1，2，3，4 学年生における英語学習能力の概要。日心・21回，1957，285。
- (64) 小保内虎夫・永沢幸七：英語学習の心理学的研究 (1)。東京教育大学教育学部。部紀要1，1955，143～163。
- (65) 小保内虎夫・永沢幸七：英語学習の心理学的研究 (2) —English sentence pattern に関する調査。東京教育大学教育学部紀要 3，1957，42～61。
- (66) 岡田泰栄：中学校卒業生の英語学力の地域差について。教育統計，1954，31，45～50。
- (67) 沢田慶輔・他：学業不振児に関する教育心理学的研究——外国語科英語の場合。日心・21回，1957，284 f。
- 〔Ⅳ〕 その他 (調査・報告およびカリキュラム)
- (68) 愛媛県教育研究所：愛媛県高等学校学力標準検査結果・英語。研究所紀要。22，1956，25～60。
- (69) 五十嵐新次郎：英語科教育法参考書目。早稲田大学教育学部，学術研究 3，1955，21～30。
- (70) 犬飼俊和他：学習型態と学習指導法からみた英語科学力をめぐる学習指導上の諸問題。山梨県立教育研修所研究紀要，31集，3号，1958。
- (71) 香川県教育研究所：香川県中学校学力検査の成績考察：英語。教育研究11A，1957，273～290。
- (72) 梶木隆一：外国語教育。日本教職員組合(編)，日本の教育，第6集。国土社，1957，71～100。
- (73) 梶木隆一：同上 第7集，1958，57～80。
- (74) 大橋茂樹：中学校英語教育課程のための参考資料 (中学校学習指導要領外国語科英語篇の研究)。兵庫県立教育研究所，昭和27年度研究報告。
- (75) 嶋田正：福井県中学校生徒のEnglish vocabulary building の統計調査——主として spelling の問題。福井大学学芸学部紀要，第1部，3，1954，37～76。
- (76) 嶋田正：入門期の英語教授——oral work から text reading への移行の際の混乱。福井大学学芸学部教育研究所，教育研究 3，1954，137～146。
- (77) 嶋田正：綴り字の誤りの傾向調査。福井大学学芸学部教育研究所，1954。
- (78) 嶋田正他：中学校英語の発音の誤りと困難点の調査。福井大学学芸学部教育研究所，教育研究 6，1958，1～45。
- (79) 白石一雄・他：英語教科書の分析。東京都杉並区立済美教育研究所，1957。
- (80) 東京都江戸川区教育研究所：中学生の教科に対する意識調査，研究所報，18，1955，33～65。
- (81) 富山県教育研究所：昭和32年度中学校学力調査 (英語科)。研究紀要，49，1957，1～12。
- (82) 明石市立教育研究所：明石市立中学校外国語科 (英語) 教育課程基準 I。明石市教育委員会教育研究報告，7，1957。
- (83) 同所：同基準 II。III。同報告，8，9，1958。
- (84) 兵庫県立教育研究所：英語科特別教育活動の研究。同所研究報告，28，1951。
- (85) 兵庫県立教育研究所：中学校英語科基準能力表 (試案) (ミニマム・エッセンシャルズ)。同所研究報告，45，1952。
- (86) 河村鉄郎・他：京都府中学校英語科能力基準表 (基準語い表)。京都府教育研究所叢書，5，京都府教育研究所，1957。
- (87) 河村鉄郎・他：同表 (基準文法篇)。同叢書，6，同所，1957。
- (88) 河村鉄郎他：同表 (四技能，背景的知識，熟語篇) 同叢書，8，同所，1958。
- (89) 楠田震：中学校英語科における文法の問題，福岡学芸大学久留米分校研究紀要，5，1955，43～48。
- (90) 大浦英：中学校英語科指導の重点と英語学習の内容的限界についての考察——岩手県基準教育課程中学校英語科の改訂試案。岩手県教育研究所研究紀要 7，1956，1～32。
- (91) 大浦英：中等英語教育の諸問題の考察 (第1報)。同上紀要，8，1957，1～37。
- (92) 大浦英：中等英語教育の諸問題の考察 (第2報)——文法に関する諸問題の考察とその位置づけの研究。同上紀要，10，1958。
- (93) 大浦英：中等英語教育の諸問題の考察 (第3報)——On minimum Essentials of Vocabulary for Lower Secondary School——同上紀要，16，1958。

<追記> この文献分析を行なうにあたり，御指導くださった沢田慶輔・肥田野直両先生に対し，感謝の意を表します。

(1959年3月9日原稿受付)